

「世紀末」に寄せて

藤田 貞一郎

社会的時間と人類史認識

このところ巷で口の端にのぼり、また紙面や画面に踊る言葉に、「世紀末」なることばがある。さして、キリスト教徒が居るわけでもない日本社会で、ノストラダムスを主題とした書物が、結構、出版界で幅を効かせ、チベツト仏教か何やらそれらしきものを依り所と頼むオウム眞理教が、西暦を基準に人類文明の危機を説き、これが予想外の人々の帰依を引き出し、世間ならびに社会を震撼させたのは、つい先頃のことであつた。

世紀末という表現は、当然のことながら、今世紀たる二十世紀のものではあり得ない。前世紀十九世紀においても、かまびすしく語られ、またキリスト教文明の影響下

にある、わけてもヨーロッパ世界の人心には、その思想と行動の面で、その痕跡が鮮やかである。「世紀末思想が満面開化（マクニ）したウィーンでは、若いドイツ人の世代であつたヘルマン・パールが、育ちつつあつたあらゆる新しいものの、新しい見方を紹介していた」とする表現が成り立つのも故なしとしない。

しかし、翻つて考えるに、日本社会を含めて、地球上に現存する非キリスト教社会についても同じく、果して世紀末なることばでもって、人類史の思想と行動を説明し得るものであろうか。或いはまた、説明できるとすれば、それはいかなる意味においてであらうか。

言う迄もないことだが、我々人類社会は、現在、通例二

種の時間概念の下に生きている。そのひとつは、地球の自転を基準にした一日は二十四時間という物理的時間であり、これは国家・民族・文明の如何を問わず共通である。

これに対して、いまひとつの時間概念である社会的時間——暦制がこれに当る——は、決して共通ではない。地球上の人類社会には数々の社会的時間が時を刻んでいるのであり、世紀末思想は西暦すなわちキリスト教文明の社会的時間概念を前提する時にのみ意味を有するに過ぎない。西暦以外に、皇紀・民国暦・イスラーム暦など様々な社会的時間が存在する。

皇紀は神武天皇即位の年を元年として起算するものである。昭和十五年（西暦一九四〇年）が皇紀二六〇〇年に当るということで、「金鶏輝やく日本の、榮ある光、身に受けて、今こそ祝えこの朝、紀元は二千六百年」との言祝歌が、声も高らかに全国で盛んに歌われたことを、私は今、子供供心とともに鮮やかに思い出すことができる——日本の社会的時間概念の特徴は、この皇紀と並んで元号制度があることである。なお、現代日本の通念となっている一世一元制は、たかだか明治元年九月八日の詔で定められたものすぎない。これもまた、中国文明からの借りものである

として差し支えない。が、「明治人間」「大正デモクラシー」「昭和一ケタ世代」などという観念を生み出すことになり、近代天皇制の日本社会への一体化に果した役割は、極めて大きかったと思われる。この点で、明治元年九月八日の詔の意義には、もつと関心が払われるべきであろう。閑話休題——。

中華民國暦は現在、台湾に所在する中華民國が、辛亥革命の翌年から起算するものである。例えば、たまたま私の手元にある「農産品批發市場管理辦法」には、行政院が「中華民國七十一年九月一日施行」と、記している。西暦では一九八二年に当る。

イスラーム暦は、預言者ムハンマドのメデイナ聖遷から起算するものである。従って、二十一世紀の幕明けを間近かに控えた世紀末の西暦一九九八年は、一四一九年に当り、イスラーム社会の時間概念からすると、世紀末なることばは、この点において無縁のものということになる。

右に述べた如く、人類史の現状において、様々な社会的時間が厳存するということは、その時間類型の数だけの文脈明ないしは社会が、それぞれの由緒なり正当性を主張していることを物語る。人類史そのものは一〇〇万年余り

以前に起点を有すると言われるが、地球上の各地で文明ないしは社会が形成されるようになると、数多くの社会的時間間が時を刻み始めることとなった。そうした社会的時間のうちで、今日生命をなお永らえているのが、既にあげた西暦・皇紀・民国暦・イスラーム暦などである。要するに、物理的時間については共通理解が成立しているが、社会的時間については、未だしというわけである。従って、世紀末なることばでもって、全ての人類史の思想と行動を説明するには、明らかに限界があるとせねばなるまい。

とはいうものの、西暦の生命力には、今日極めて強靱なものがあり、それが世紀末ということばに、何ものか実体があるかのごとき印象を、時に人々に与えることがあるのは否めない。しかし、イエスの誕生時を紀元とする西暦には、実際はイエスの誕生は西暦紀元前四年であるにもかかわらず、これを誤算しているという説があることから推測できるように、キリスト教文明の由緒ないしは正当性を主張する勢力が力を増すにつれて、西暦という社会的時間が後年になって観念の産物として登場したにすぎない。ということばは、人類社会に共通の社会的時間として、いずれ環境暦——と仮に名付けておくが——という暦制の採用さ

れる日が来るかも知れぬということでもある。地球温暖化現象をはじめ、われわれ人類生存の母体である地球をめぐる環境の現状は、数々の文明あるいは社会が、それぞれその由緒や正当性を、後生大事にふりかざして、自己主張をぶつけ合うという時間と空間を許さぬ段階に近づきつつあるからである。環境元年は、国連主催のもと、リオデジャネイロで世界環境会議Ⅱ地球サミットの開かれた西暦一九九二年が、振り返り見て当てられることも十分予想できる。

それにしても、西暦が人類史の現段階で、社会的時間として、極めて重要な役割を演じていることは否めない事実である。それは、コロンブスの新大陸発見に端を発する大航海時代以後、地球上の各地に進出し、十九世紀後半以後に成立する世界資本主義体制を担い、人類全体の生存様式に圧倒的な影響力を及ぼすに至ったヨーロッパ白人の、社会的時間が、他でもない西暦であるからである。これが、地球上に現存する非キリスト教社会についても、世紀末思想はさておくとしても、その思想と行動の時間上の整理基準として、西暦が、現に使用される理由であることは、いふまでもあるまい。

かかる非キリスト教社会の中でも、とりわけ日本社会は、明治期以後はおおむね、西暦を社会的時間とするヨーロッパ人のキリスト教文明に、けなげなほどまでに素直というべき抵抗感が少ないというべきか、いわばそういう側面を有することをもって特徴とするとして良いと思われる。冒頭にあげた事例もさることながら、西洋クラシック音楽の演奏家、キリスト教主義学校教育機関といったものが、まことに数多く存在することを考えれば、納得できる筈である。他の社会、たとえばイスラーム教社会と比べて見ると、その特徴はいよいよ鮮明である。イスラーム圏に、オーケストラが存在することを耳にしたことがないのは、私の短見のなせる技でもあろうか。果して、バツハの教会音楽あるいはまたシューベルトの「アヴェ・マリア」が、これらの地域で演奏され、人々がそれに聞きほれるということがあるのだろうか。私は、事の善悪を問うているのではない。

こうした特徴を持つことになった理由のひとつが、幕末開港後の日本社会が、ひたすらキリスト教文明の欧米社会を目標として、新たな社会建設の道を歩んで来ていることにあることは、たしかである。近代日本の精神面の展開に

大きな影響を与えた福澤諭吉の『文明論之概略』が、イスラーム認識を全く欠除しているのは、まことに象徴的といつて良い。³⁾

かかるキリスト教文明への抵抗感とイスラーム認識、この両者の欠除に極めて深い関係があると思われるのが、日本社会における周知のロビンソン・クルーソー物語受容史である。

もうひとつのロビンソン・クルーソーの世界

エドワード・W・サイードは近著『文化と帝国主義』の中で、ロビンソン・クルーソーは、遠方の非ヨーロッパ地域の島に領地を創出するヨーロッパ人である。或いは大植民地帝国の基礎を築くことになる十六・七世紀の冒険航海談議に直結する海外進出主義から、明らかに設定された人物像である、と記している。⁴⁾だが、この言及を除くとこれまで、ダニエル・デフォーのこの物語は、イスラーム社会では一度として、その地域の言語に翻訳出版されたことはなかったのではあるまいか。⁵⁾その理由は、この物語がヨーロッパ人の海外旅行談議の趣を備えていて、およそイスラーム教社会の人々の関心を喚起するといった内容の

ものではないところにあるように思われる。⁽⁶⁾

そうした物語を、日本社会はヨーロッパ白人流に受容し、いつくしんで来ているというわけである。

「ダニエル・デフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』は、孤独な難破者が、漂着した無人島をいかにして幸福な我が家にしたかを語った物語である」。これはM・グリーン(7)の著書の冒頭の一節であるが、日本では安政四年(一八五七)に横山由清の訳になる『魯敏遜漂流紀略』によって世に知られるに至って以来、もっぱら右の一節と相似た受け取り方が通念となつてゐる。少年少女向けの翻訳から始めて数々の成人向けのものもこの通念に従つてゐるとして差し支えない。例えば、新潮文庫には吉田健一訳のものが収録されているが、『ロビンソン漂流記』(一九五一年)という表題の一冊本であり、完全に右の通念に立つ訳業である。これに対し、岩波文庫には平井正穂訳のものが収められているが、これは上・下二冊本の訳業で、上は『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』(一九六七年)——すなわち第一部——、下は『ロビンソン・クルーソーのその後』(一九七一年)——すなわち第二部——となつてゐる。

ところで、これらの通念が見逃している重要な事実、それは、元来ダニエル・デフォー(一六六〇?—一七三二)の著わしたこの物語は、三部から成り立つ著作物であり、第一部は一七一九年四月、第二部は同年八月、第三部『ロビンソン・クルーソー反省録』が翌年に出版されていて、さらに第三部(8)の序文の冒頭で、三部は一部と二部の所産であるというだけでなく、一部と二部がむしろ三部の所産であるとしてよい。この物語は寓話めいているが、実際の歴史物語でもあることである。

にもかかわらず、どういふものか通念の世界からはこの点が脱け落ちてしまい、先に引用したM・グリーン流の解釈とか、「孤島におけるロビンソンの思考と行動の様式が示している人間類型は」、「近代の合理的な産業経営を可能にするような経営者と労働者、そういう二つの資質が一つに結びついて共存している」⁽⁹⁾姿であるとか、「経済学の前提となつてゐる人間類型、つまり「経済人」というもの⁽¹⁰⁾がそもそもロビンソンの人間類型から由来」する、というよ⁽¹⁰⁾うな受け取り方になつてゐるのが、日本においても通例である。この常識というか、はたまた思い込みといふべきか、その思考の枠組みにはまことに強固なものがあ⁽¹⁰⁾り、第

三部をも読み通した筈の平井正穂の解説を読めば、それがよくわかる。このような通念が成立した理由としては、例えばマルクスが『資本論』の第一部第一篇第一章で、「経済学はロビンソン物語を好むから、まずロビンソンの島の生活を見よう」と記しているように、経済学の視角からこの物語の主題と含意を読み解こうとしたことが、ひとつ考えられる。

しかし、今日の通念・常識はいかにもあれ、第三部の序文の冒頭の発言があるからには、彼の意図に従った読み解き方があつてしかるべきであろう。当時の人類社会の世界状況の中で、イギリス社会が占めた位置を念頭にしながら、歴史学の視角から読み解くのが、これである。そして、そこに見えて来るのが、次に略述する物語と主題なのである。

ローマ帝国の文明Ⅱ世界がイスラーム勢力の地中海進出によつて、完全に崩壊したあと、ユーラシア大陸の西端に久しく踞踏していたヨーロッパ白人の社会は、一四九二年のコロンブスのアメリカ新大陸発見、一四九八年のヴァスコ・ダ・ガマによるインド航路発見を機に大航海時代に入り、キリスト教を基盤とするヨーロッパ文明優位の人類史

の扉を開くことになり、これが今日に迄いたる。

全篇、一七世紀中葉から一八世紀初頭にかけての年次を明示してまとめられたこの物語の第一部は、アメリカ新大陸の発見により成立する環大西洋三角貿易の仕組みの中で活躍し致富するロビンソンを描いており、そうして手に入れた莫大な資金で、ベッドフォード州に農園を買い、世界の遠い地域との交渉を絶ち、「一種の天上の生活をおくる」、いわゆるカントリー・ジェントルマンの中流の生活に到達するまでの話となつてゐる。第二部の冒頭部分で、この理想の中流の生活が簡潔に要約されたあと、ロビンソンは甥のすすめもあつて再び冒険の生涯を送ることになるが、今度ではアフリカ南端をまわつてアジアはインドに至り、そこでアジア前近代貿易の仕組みの中に新規参入して中継貿易で活躍し、そのうち清朝の中国から中央アジア、ロシアといったユーラシア大陸の地を横断して一〇年余を経て、一七〇五年にロンドンに帰着することになる。

右の要約からもわかるように、この物語は通念がとらえる超歴史的・経済学的世界を主題としてゐるのでは決してない。第三部の序文冒頭の表現にあるように、実際の歴史物語なのであり、主題はイギリス社会を主人公にしてロビ

ンソンに仮託したヨーロッパ勢力の世界進出史といっているであろう。

それでは、一部と二部の所産であると同時に、他面一部と二部の歴史過程を生み出すことになる第三部で、ダニエル・デフォーはいかなる反省録を記しているのか。注目すべき点を幾つか紹介して、この歴史随想を閉じることにしよう。

平井正穂は、カトリックもプロテスタントもともに参加できる普遍的な教会を構想する「愛(チャリティ)」という理念に、デフォーのあらゆる行動と思想と作品の基調がある」と、解説に記して形而上の世界にその理解をとどめているが、その形而上の世界のとらえ方自体に深みが欠けている。

というのはこうである。デフォーは、ロビンソンの口を借りて「反省録」で語る。この愛しき我が身こそが生の目的であり(二ページ)、神についての瞑想に必要な「精神の落着きは、修道士くさい独居房や無理強いされた隠棲でよりも、日常生活の場の方が、はるかに楽しく身につけることができる」(七ページ)。「人類に至福をもたらす唯一の心の安らぎは、徳と正義に基づくものである」(六九

ページ)。が、現世は無神論と反無神論の併存する所でもある。すなわち、「我々はかくもひどい不信心がはびこりすぎている時代に生きていなければならない、信仰心が確言され、神の御名が認められかつ敬われる所で生きてい」(八九ページ)のである。しかし、「世界の大部分、想像を越えるはるかに広い地域が、人性の最低の退廃、しかり野蕃生活に落ちているのである。そこでは、人生の主たる目的は単に飲み食いすることにのみあるように思われる」(一〇七ページ)。ところで、イスラーム教といえば、「一方でクルアーンを朗読し、他方で洗浄をするのが、イスラーム教徒の宗教行事であり、それ以外は、話すことといえば、蕃性と野蕃な慣行で、もち切りである」(一一二ページ)。私は迷信と非キリスト者の考える靈魂の世界観を忌避するが、神の摂理(Providence)の見えざる手は信じる(一一三ページ)。しかし、私は、キリスト教の地球全面征覇を無理に望むものではない(二〇七ページ)。「私は、宗教は剣によって抜けるべきであるという考えは、さほど持っていない」(二二七ページ)。「キリストを信じないからといって、人を処罰したり迫害したりする考え方は、あまり持たない」(二二三ページ)。イエスキリストに

全世界が従う日は近いという人もいるが、「私は、これまでの旅と啓示の中でさようなことを見聞しなかったし、否、ただの一語も耳にしていない」(二三五ページ)という一節で、「反省録」をひとまず閉じている。

「天使の世界の光景」では、使徒でさえもとは無知であった(二三九ページ)と記し、人類の住む世界がいかに小さなものであるか(二六一ページ)に触れ、太陽系について言及し、地球だけが生存可能だと判断する(二六三〜二六四ページ)。そして、「人類が、近視眼の生物であり、目前のものしか見えないことこそ幸福なのだ」(二七五ページ)と云い、神 (God) も悪魔 (Devil) も存在しないという考え方を戒め、常識の重要性を強調した上で(二九五〜三二二ページ)、「一言にしていえば、全てこれらのことは、私どもに、現世の種々の事がらに聖なる神の摂理の偉大なる監督が及んでいること、見えざる世界、靈魂の實在、それに私どもとそれらのものとの間を結ぶ認識能力といったものについての、明らかな現存を確信させることになるのである」(三二四ページ)と結んでいる。

「附録」では、アレクサンダー・セルカークの孤島での生活記録——これが有名な第一部の資料となっていることは

周知のところ——が叙述されるが、最後の一節はこうである。「このありふれた人間の物語は、その不足感を、本来必要とするものに限る人間が、一番幸福なのであるという記憶すべき一例である。そうして、欲望を増加させる人間は、その取得するものに比例して、不足感をつのらせるのである。あるいは、彼自らの表現を使えば、私には今は、八〇〇ポンドの財産があるが、一フアーディングの財産もなかった時ほどの幸福感もない」(三二八ページ)。

以上、略説したところが、筆者が読み取る、もうひとつのロビンソン・クルソーの世界である。ベッドフォード州での農園生活のくだりで、「悪徳もなく不安もなく、老人は苦を、若者は惑いを感じず」と、デフォーは記しているが、これが、彼個人の今生の理想状態であった。これを訴えたかったのだと、私は解する。が、個々人の思いと社会全体の動きは決して同一ではない、ことの方が通例である。人類史は少なくともこれまでは、そういうふうには展開して来ている。十七世紀半ば以降、インド洋貿易をめぐる西ヨーロッパ諸国の新しい進出によって、既存のイスラム世界の国際商業ネットワーク構造は解体して、代って西ヨーロッパを主軸とした世界経済の成立が告知される⁽¹⁾。

ロビンソン・クルーソーの物語は、今日に至る人類史の大転換点のひとつを舞台にした、類まれな傑作と、私には思えてならない。決して子供だましの冒険譚にとどまらないといふべきである。それを冒険譚に矮小化させたのは、その後勢いを増す白人ヨーロッパ諸国の膨張的帝国主義の動向であつた。M・グリーンはいう。「我々白人国家の市民は、この物語が繰り返し語られるのを好んで聴きたがつた。なぜならこの物語は我々の心奥に潜在する欲望を養つてきたからである。ロビンソン物語は、我々の文化的エンジンの神話的燃料だつたのである」⁽¹²⁾。

我々日本社会の人間が問題とすべきは、M・グリーンが美事にまとめているような、ヨーロッパ白人流の、ロビンソン・クルーソー理解に、何故我々は安住して来たのかということである。

最近、日本社会にも、通説と異なる理解の仕方を採用するものが出て来ている。岩尾龍太郎の「ロビンソンの皆」(『現代思想』二一巻二号、一九九三年)、正木恒夫『植民地幻想——イギリス文学と非ヨーロッパ——』(みすず書房、一九九五年)が、それである。が、「一種の幻想小説と考へた方が、テクストの実態に近い」(後者の九八ページ)と

判断したり、前者は「ロビンソンは、通説の健全な近代人像としてよりはむしろ、現代へと通底してゆく病的な像」と規定するなど、全く筆者には理解しかねるものである。この両者は、年次を明示した、寓話めいているが、実際の歴史物語でもあるとしているデフォーの表現だけでなく、全三部構成の意味を一体全体どう理解しているのだろうか。

注

(1) 本山美彦『ノミスマ(貨幣)——社会制御の思想——』(三嶺書房、一九九三年)三〇ページ。

(2) 日本式でいうと、農産物卸売市場管理規則となる。

(3) 「今の西洋の文明は、羅馬の滅後より今日に至るまで、おおよそ一千有余年の間に成長したるもの」(九ページ、岩波文庫本、一九九五年)。「今の西洋の文明は羅馬滅亡の時を初とす」(一九二ページ)。「紀元千零九十六年、十字軍の事あり。この軍は歐羅巴の人民、宗教のために力を合して小亞細亞の地を征伐し、全歐羅巴洲を味方と為して亞細亞に敵したることにて」(一九九ページ)と記し、ピレンヌ・テーゼが発表される以前のことであるが、イスラム文明は関心外にあり、「東方文明」(二〇〇ページ)という表現を使

うにとどまっている。

- (4) Said, Edward W. 1994. *Culture and Imperialism*. New York: A Division of Random House, Inc. p.xii, p. 70.
- (5) 余り強力な証拠とはなり得ないと思うが、『雄松堂新春古書在庫目録』二〇三号(一九九六年)には、『ロビンソン・クルーソー漂流記』の各種異版集成として二〇点あがっているが、英語版以外ではフランス語・オランダ語・ドイツ語・ラテン語の各語版のみである。
- (6) その理由の一端の説明を試みるのが、本文の意図である。より詳しくは、拙稿「もうひとつのロビンソン・クルーソーの世界——我流読書ノートの試み——」(『同志社商学』四三巻四号、一九九二年)を参照して戴けるならば幸甚である。
- (7) 岩尾龍太郎訳『ロビンソン・クルーソー物語』(みすず書房、一九九三年)一ページ。
- (8) Defoe, Daniel. 1720. *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe, with his Vision of the Angelic World*, ed. by George A. Aitken, AMS Press, New York, 1974. p.ix 以下、第三部については、これから引用する。本文中に引用文の該当ページを示す。
- (9) 大塚久雄『社会科学における人間』(岩波書店、一九七七年)四五ページ。
- (10) 右同書・六七ページ。
- (11) 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業』(岩波書店・一九九一年)四四一ページ。
- (12) 岩尾龍太郎訳・前掲書四ページ。
- (13) 正木恒夫は第一部の環大西洋三角貿易は読みとっているが、どうしたことか、第二部のアジア前近代貿易が視野に入っていない。また「第三部を一応のぞいたとしても」(九九ページ)という表現もあるように、三部構成の意味と第三部の内容が十分理解できていないと、批判せざるを得ない。

(一九九八年二月一日)

(ふじた ていいちろう・同志社大学教授)